

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：32606

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13181

研究課題名（和文）近世後期・幕末における公家による金融活動の総合的研究

研究課題名（英文）Financial Activities of the Court nobles in the Edo Period

研究代表者

佐藤 雄介（SATO, Yusuke）

学習院大学・文学部・准教授

研究者番号：20624307

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代後半から幕末において朝廷で権勢を振った鷹司政通（鷹司家）を対象に、公家の金融活動がいかなるものであったのかを具体的に明らかにし、そこから当該期における公家社会の実態や、都市京都と公家の関係性、江戸幕府と天皇・朝廷との関係（＝朝幕関係）などを考察した。当該分野はとくに研究の蓄積が薄く、まずは関係史料の収集が必要であった。研究期間を通じて各種史料所蔵機関に赴き、史料調査を行った。それらによって集まった史料（の複製）などをもとに検討を行い、鷹司政通（鷹司家）の権勢と金融活動との関係性や、金融活動の実務を担った都市商人の存在（ひいては都市京都と天皇・朝廷との関係性）などを具体的に究明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年、近世の天皇・朝廷研究は飛躍的に進展しており、政治・社会・文化など各種の方面において種々の役割を果たしていたことが明らかになっている。また、天皇や公家の存在形態なども、かなり具体的に究明されている。しかし、公家による金融活動については、その重要性が述べられつつも、ほとんど研究されてこなかった。本研究は、その公家の金融活動の実態をおもに近世後期から幕末を対象に論じたものである。具体的には、近世後期～幕末の朝廷で権勢を振っていた鷹司政通（鷹司家）による金融活動の実態を究明し、それが政通による朝廷運営に及ぼした影響などを論じた。

研究成果の概要（英文）：I have conducted research on the financial activities of the Court nobles. Through this research, I investigated the relationship between Kyoto and the Imperial Court, and between the Edo Shogunate and the Imperial Court. Specifically, the research focused on Takatsukasa Masamichi, who was a powerful figure in the Imperial Court. The relationship between the power of Takatsukasa Masamichi and his financial activities, the role of merchants who were responsible for the financial activities of Takatsukasa Masamichi, are clarified in detail.

研究分野：日本史

キーワード：公家 天皇 金融活動 名目金 財政 鷹司政通 朝廷 貸付

### 1. 研究開始当初の背景

近世後期以降、門跡寺院などによる貸付金(名目金)が大坂などの諸都市において、ひろく展開していたことは、よく知られている。京都においても、このような貸付金(名目金)が浸透していたことは、すでに指摘されているが、分析の対象として俎上に載せられてきたのは、おもに門跡寺院によるものであった。しかし、じつは京都においては、公家による金融活動もひろく行われていた。この点についても先行研究において、すでに指摘されていたが、その実態に関しては、ほとんど研究されてこなかった。近年、研究代表者がいくつかの論文を発表したが、貸付先の広がりや運用方法など、いまだ不明な点が多く残されている。

上記のような公家による金融活動に関する研究は、近世の天皇・朝廷研究や都市史研究、政治史研究、経済史研究など多くの分野に資するテーマであり、近世の政治や社会を考えるうえで必須のものとする。

### 2. 研究の目的

本研究では、摂政・関白を独占した五摂家のひとつである鷹司家などを対象にして、近世後期～幕末における公家による金融活動の実態を具体的に究明することを目指す。そのうえで、それらを通じて、都市京都と天皇・朝廷・公家との関係性、朝廷内における鷹司家の位置づけや当該期の朝幕関係の特徴とその変遷、公家財政なども含めた総体としての朝廷財政のあり方などを考究する。

については、京都の中でひろく展開していた種々の貸付金(名目金)の中で、公家による貸付金(名目金)がどのように位置づくのかといった点を明らかにすることで、天皇・朝廷・公家と都市京都との関係性を考える。また、公家による金融活動の実務は、公家と関係を持つ都市商人らが担っていたと思われ、その元手には商人の資金が投入されていたと考えられる(「差加金」)。したがって、公家の金融活動の研究を進めることは、そうした都市商人に関する検討にもなる。公家の金融活動の研究は、必然的に都市京都と天皇・朝廷・公家との関係性を考察することにも繋がる。

に関しては、とくに近世後期～幕末においてながく太閤・関白などとして権勢を振るった鷹司政通を中心に考究する。かれの権勢の源のひとつが経済力であったことは従来指摘されてきたことだが、それを支えたもののひとつとして、鷹司家の金融活動を考える。鷹司政通の朝廷運営や鷹司家の朝廷内での位置づけを考察するうえで、当該金融活動がいかなる意味を持ったのかを検討し、さらにそこから当該期の朝幕関係の実態と変遷についても考究する。

についていえば、本研究を進めることは、研究代表者が従来検討を加えてきた朝廷財政研究の深化にもなる。これまでの研究では禁裏御所をはじめとした御所の財政を対象としてきたが、通常「朝廷」といった場合、天皇家とその一族だけではなく、公家なども構成員として含む。したがって、本来は朝廷財政を研究する際には、御所の財政だけではなく、公家の財政も含めて考えなければならず、実際両者には関連しあう面があった。その意味において、本研究は朝廷財政研究の深化にも繋がる。

### 3. 研究の方法

当初の計画では、京都府立京都学・歴彩館や京都市歴史資料館など、多くの史料所蔵機関に積極的に赴き、関係史料の複製を収集する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、各史料所蔵機関において、日数や滞在時間の短縮など、多くの閲覧制限が加わるようになってしまった。また、こちら側においても、調査に赴くのを躊躇せざるをえないような状況が種々生まれた。その意味でいえば、当初の予定よりも調査に行く機会、また一回の調査に従事できる期間が減少してしまったことは否めない。

ただし、東京および東京周辺の史料所蔵機関(東京大学史料編纂所や国文学研究資料館、宮内庁書陵部など)にも関係する史料が相応にあることが判明したため、当初はそれらを中心に調査を実施した。また、時が経つにつれ、新型コロナウイルス感染症に対する対策が種々実施されるようになったこともあり、各史料所蔵機関における制限も緩和されるようになった。そのため、徐々に遠方への史料調査も実施できるようになった。さらに、現在刊行されているもろもろの史料集の中にも、当該研究と関連する史料が種々収められていることが判明し、それらの調査も積極的に実施し、必要なものは購入した。

結果としては、かなりの数の関係史料について、複製を得ることができ、それらをもとに研究を進めることができた。

#### 4. 研究成果

前述したように、本研究については研究の蓄積が薄く、史料の所在情報すらも不十分であった。そこでまずは、関係史料の調査を積極的に行った。具体的には、京都府立京都学・歴彩館や京都市歴史資料館、東京大学史料編纂所、国文学研究資料館、宮内庁書陵部、学習院大学史料館などに赴き、鷹司家のものをはじめとして、多くの関係史料の複製を得ることができた。それらの史料を用いて、公家による金融活動の実態、規模や名目、貸付先、実務を担った町人の存在形態など、を究明した。

まず、近世後期・幕末の朝廷で権勢を振るった鷹司家の貸付金については、貸付先の広がりや実務を担った町人のひとりである茶染屋五兵衛の性格などをより詳細に明らかにした。そのうえで、この貸付金が政通の朝廷運営や公家社会内での位置づけにいかなる影響力を及ぼしたのかをより深く考究することができた。たとえば、鷹司家と縁戚関係などを結んだ公家らが優遇的な措置を受けていた実態を明らかにし、そうした鷹司家から優遇を受けた公家らが、政通の朝廷運営の基盤にあった可能性などを指摘した。

以上の成果なども含めて、19世紀前半の朝幕関係の実態と変遷をより大局的な視点から考究する講演を行った。近年、光格天皇（上皇）期に、天皇・朝廷が積極的な活動を行っていたことが明らかになっているが、そうした天皇・朝廷の活動が、幕末史にどのような影響を及ぼしたのかについては、議論が必要との提起がなされている。当該講演は、そのような問題提起を念頭に、

朝廷では光格天皇（上皇）が、幕府では将軍（大御所）徳川家斉が君臨した時期である大御所時代の朝幕関係の特徴、彼らの死後、つまり大御所時代終焉後からペリー来航直前までの朝幕関係の実態とその変遷を論じた。さらに、上記講演をもとにして、当該期の朝幕関係における鷹司政通の位置づけなどに関して、より考察を深めた論考も一本書き上げた（未刊行、原稿は出版社に提出済み）。

このほか、幕末の天皇・朝廷研究の論点について述べたものや、幕府財政・朝廷財政の課題と展望を詳述したもの（未刊行、原稿提出済み）の中などでも、公家による金融活動の問題について論じた。これらも当該研究課題の成果のひとつである。

なお、本研究課題で収集した関係史料については、十分に検討できていないものも残されている。それらの検討と文章化に関しては、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐藤雄介	4. 巻 60
2. 論文標題 講演記録 開国前夜の天皇・朝廷と鷹司政通	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 学習院史学	6. 最初と最後の頁 101-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤雄介
2. 発表標題 開国前夜の天皇・朝廷と鷹司政通
3. 学会等名 学習院大学史学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 町田明宏編（分担執筆：佐藤雄介）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 280
3. 書名 幕末維新史への招待	

1. 著者名 岩城 卓二、上島 享、河西 秀哉、塩出 浩之、谷川 穰、告井 幸男編（分担執筆：佐藤雄介）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 388
3. 書名 論点・日本史学	

1. 著者名 学習院大学文学部史学科編（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 256
3. 書名 新・歴史遊学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------